

論  
説

倫理規範の法的性格

——自然法論上からの考察——

アントニ・コシチ

目次

はじめに

一 倫理規範

(一) 規範と価値

(二) 倫理規範の哲学的出発点

(三) 倫理規範を規定するための二つの哲学的出発点

二 法

(一) 法の概念

(二) 永久法

(三) 自然道徳律および自然法  
むすびにかえて

はじめに

人間は生物学上の欠如存在であるが故に、生まれながらにして社会的、または文化的存在であるという考えである。つまり欠如存在なるが故に、人間のみが生き永らえるため規範を必要とする。社会的または文化的存在とは結

局、規範存在のことに他ならない。人間は自由な人間の共同生活を可能にするのみならず、それをより善きものにする前提として規範を作り、これに自らを適合させねばならない。<sup>(1)</sup>

右に述べたように、人間には規範が必要であり、法規範よりも倫理規範が必要である。<sup>(2)</sup> 倫理規範とは、主体 (Subject) と客体 (Object) との間の諸関係から、つまり倫理的に正しいかかわりあいによって規則が生じてくる。人間に対するある要求、ないしはある行為の倫理的な重要さを左右する要素が対象であるが、ただそれ自体において見られた対象ではない。価値を有するものとしての対象、価値秩序の全体においてそれが占める位置、それがまわりの存在に対してどのような具体的関係に立っているか、とりわけ行動している人間 (つまり特定の状況下の人間) に対してどのように関係しているかといった面において見られた対象である。ある行為について最終的な評価を下すにさいして決定的な意味を持つのは、対象および特殊な状況と、並びに人間がその対象に対してとる内的な態度、つまり意図もしくは動機であり、まさにこれによって人間がなにをかれの志向および行動の価値的対象たらしめているのか、ということが規定されるのである。

私はここで、倫理規範をそれらの法的性格の下に取り扱いたいと思う。<sup>(3)</sup>

#### 注

- (1) H. Knöting, Relevanz humanökologischer Ergebnisse für juristische Regelungen. Skizze über das "Anliegen der Naturrechtslehre" in humanökologischer Sicht, in: D. Mayer-Maly, P. M. Simons (Hrsg.), Das Naturrechtsdenken heute und morgen. Gedächtnisschrift für René Marcic, Berlin 1983, S. 773-802; H. Lenk, Erweiterte Verantwortung. Natur und künftige Generationen als ethische Gegenstände, in: D. Mayer-Maly, P. M. Simons (Hrsg.), a.a.O., S. 833-846
- (2) R. Jakob, Naturrecht oder Kulturrecht? Psychologische Überlegungen zu Recht und Moral, in: H. Mieschler, E. Mock (Hrsg.), Ius humanitatis, Berlin 1980, S. 77-88
- (3) O. Höffe, Sittlichkeit als Moral und als Recht. Eine philosophisch-ethische Problemskizze, in: Ethik

institutionellen Handelns, 1982; N. Hoerster, Wirksamkeit, Geltung und Gültigkeit von Normen. Ein empirischer Definitionsversuch, in: D. Mayer-Maly, P. M. Simons (Hrsg.), a.a. O., S. 585-596; E. Heitel, Ontologische und transzendente Begründung der Ethik, in: V. Zisfkovits, R. Weiler (Hrsg.), Erfahrungsbezogene Ethik, Berlin 1981; K. Wojtyła, A. Szostek, T. Syczen, Der Streit um den Menschen. Personal Anspruch des Sittlichen. Kevelaer 1979, S. 95-103

## 一 倫理 規範

### (一) 規範と価値

規範がとる表現形態は否定(禁令)か、あるいは肯定(命令)である。いずれの場合にも規範はその背後にある価値を指示しているが、この価値自体は、言葉のわくにはめこまれた規範、とりわけ否定の形で言い表わされた規範がどうしても表現しえないほどにずっと豊かなものである。しかも価値のもっとも豊かな実現も規範の下にはいる。価値は規範を与えるものである(Der Wert ist das Normgebende)。価値が倫理的行為にとって真に重要な対象である。価値はその価値性それ自体、ならびにそれが人間の価値を基礎づけるものであるという連関において、人間に対して規則、つまり人間の行動にとっての不変規準(規範)を課する。

倫理規範は人間の自由を勝手に制限するものではなく、むしろ価値ある対象に発して自由を指向するところの呼びかけ、価値と自由を保持し育てようとの呼びかけである。なんらの価値にも基づかず、またなんらの価値ある課題を提示しないところの規範は、いづれのことにも倫理的な拘束力を有しない。それ自体においては違った形をとることもでき、命令ないし掟においても、その核心をなすものはわれわれに訴える。もしくは義務を課すところの価値でなければならぬ<sup>(1)</sup>。

註

- (1) E. Bodenheimer, Die Beziehung des Naturrechts zu den Grundwerten der Rechtsordnung, in: D. Mayer-Maly, P. M. Simons (Hrsg.), a. a. O., S. 265-272; D. A. Seeber, Was sind Grundwerte?, in: Herderkorrespondenz 30 (1976), S. 381-384; K. Lehmann, Grundwerte in Staat und Gesellschaft, in: Herderkorrespondenz 31 (1977), S. 13-18; E. Heitel, Ontologische und transzendente Begründung der Ethik, in: V. Ziszkovits, R. Weiler (Hrsg.), Erfahrungsbezogene Ethik, Berlin 1981

(二) 倫理規範の哲学的出発点

倫理規範の哲学的な探求は命ぜられていること、すなわち倫理規範の内容から出発して、問題を掘りさげ、ついで当為(Sollen)の最終的な根拠について、義務もしくは法としての規範について問いを發することができ。しかもいかなる哲学もこの原理を排除することはできない。すなわち、「存在が当為を裏付け、行為は存在と合致する」(operari sequitur esse)。この原理を認識論的に表現すると、「当為の理解は存在の理解に符合する」(Denn Seinsverständnis entspricht das Sollensverständnis)となる。こうしてあらゆる哲学が「人間は存在に即して行動をしなくてはならない、もしくはすべきである」(Der Mensch muß oder soll seinsgemäß handeln)との普遍的な公理(倫理規範)に到達する。あらゆる非人格的な存在において、つまりその活動はある事物の固有の本性、ならびにそのものが環境に対して有する関係によって確定されている。これは必然性の規範もしくは規則である。人間の場合、存在は侵すべからざる仕方で賢明かつ妥当な規範であるとはいえ、それは自由のための規範である。人間は非理性的な事物と違って、固有な存在の規範に自然必然的に縛られているのではない。人間はそれを認めることも無視することもでき、自ら認めた規範を自由に遵守することも、それに背くこともできるのである。

倫理規範の内容に関しては、人間はそれを自分自らの本質、ならびにそれがまわりの事物に対して有する関係から

学びとることができる。それは人間に固有の本性法 (Wesensgesetz) であり、これに連関してわれわれはなんらかの根拠をもって人間は自律的、「自己立法」(Selbstgesetzgebung) 的であるということができ、同時にこの場合にはただちににつきの問題が生ずる。すなわち、人間がかれの恣意 (Beliebigkeit) (これもまた人間の存在に属する一つの可能性である) を人間の本性規範の上に置くことをなが妨げるのか。これに対してはとりあえず、人間は勝手に規範をふみこえることによって、自らをかれの本性の真の可能性以下のものにし、かれの本性に背くからである、という答えができる。しかしこうした考慮はすべて、たんに倫理規範の有用さや有益さを示すものにすぎない。或る絶対的な仕方では義務を課する立法者があってはじめて、それは拘束力ある法となる。われわれが倫理規範の拘束性の最終的な根拠を問うをいには、人間の自己自律性 (自律、Autonomie) はすべて消滅する。つまりそれは神の法 (神律、Theonomie) のうちに解消する。倫理規範の内容も、人間が絶対者 (神) の前において自らの真実の本質、ならびにかれの自由にふくまれた最も本質的な可能性とを認識するときをはじめて、その範囲、深さがあまるところなくあらわれる。<sup>(1)</sup>

#### 註

- (1) J. Sauer (Hrsg.), Normen im Konflikt. Grundfragen einer erneuerten Ethik, Freiburg i. Br. 1977; R. Spaemann, Moralische Grundbegriffe, München 1982; N. Hoerster, Wirksamkeit, Geltung und Gültigkeit von Normen. Ein empirischer Definitionsvorschlag, in: D. Mayer-Maly, P. M. Simons (Hrsg.), a. a. O., S. 585-596; R. Jakob, Überleben durch Naturrecht? Zur Ergänzungsbedürftigkeit der mit der menschlichen Existenz gegebenen elementaren Normen durch das moderne Rechtsdenken, in: D. Mayer-Maly, P. M. Simons (Hrsg.), a. a. O., S. 763-772; K. Wojtyła, A. Szostek, T. Styczen, Der Streit um den Menschen. Personaler Anspruch des Sittlichen, Kevelaer 1979, S. 20-22

### (三) 倫理規範を規定するための二つの哲学的出発点

(a) 価値哲学 (Wertphilosophie) は或る包括的な倫理規範を定式化しようとの注目すべき試みを行なっている。ところで、永遠哲学 (philosophia perennis) の内部においては、存在と価値、存在秩序と価値秩序との相関を認める価値哲学のみが承認される。存在哲学上の観点から見れば、最高の客観的規範は、「行為の秩序は存在の秩序を厳守しなければならぬ」(Die Ordnung des Tuns muß die Ordnung des Seins einhalten) と表現される。価値哲学の側からいうと、それは「価値秩序に合致する行為は善である (Gut ist das Tun, das sich an die Wertordnung hält) と表現される。したがって「倫理規範とは正しい選択の規範である」(Die Sittennorm ist also die Norm des richtigen Vorziehens)。すなわち、われわれはより低い価値ではなく、むしろより高い価値のほうを選ぶとらなければならないのである。悪とは意図ならびに行動において、なんらかの誤れる「選択の法」(Vorzugsgesetz) を自己中心的にうちたてることであるが、正しい選択は価値の高低 (Werthöhe) とならぬで、時として価値の緊急 (Wertdringlichkeit) さえも考慮に入れなくてはならない。ただし価値秩序ならびに現実在の世界においては、より低い価値もまたそれぞれ占めるべき位置があるのだから、行為においてもそれらを考慮に入れなくてはならない。だが時としては状況によって、より低い価値の実現もしくは育成がより高い価値のそれよりも緊急であるということが可能である。とはいえ、われわれはつねに (もしそうしなかったらより高い価値が危険にさらされる場合には) より低い価値を犠牲にする覚悟ができていなくてはならない。価値秩序を保持する義務は、ひとまずそれが全休として秩序という性格を有するところからして明らかである。すなわち、なんらかの真正の価値が傷つけられる場合には、いつでもなんらかの程度に全価値秩序が抵抗する。しかし価値秩序の法的性格 (Gesetzescharakter der Wertordnung) がその全容をあらわすのは、われわれがこの秩序の頂点に、そしてこの秩序を越えて、生きた価値位階者

(Der Werthierarchie) すなわち絶対者(神)の価値人格(die Wertperson)を認める場合である。

(b) ある包括的な倫理規範の確立へと向かうもう一つの重要な哲学的試みは、右に論じた価値倫理学とは違って、倫理的行為の客体(価値対象)から出発するのではなく、行動する主体、つまり人間から出発する。すなわち、「人間として行動せよ」(Handle als Mensch)というのがそれである。最高の規則として姿をあらわすのは、人間のあらゆる素質を均衡のとれた仕方で働かせ、また発達させるということである。行動する人間なるものを出発点とすることは先天的に(a priori)間違っているわけではない。それが危険な行き方となるのは、人々が(人間がそのうちに存在しているところ)包括的で義務的な秩序についての倫理的体験を認めないか、あるいは第二次的なものとして人間に下属せしめる場合、もしくはそもそも誤った人間像を有する場合だけである。

正しい選択規則のうちに倫理規範を見ようとするさきの試みにおいて決定的な意味を持つのは、正しい価値位階(Werthierarchie)はいかなるものかという問いである。これと同様に、いまの場合に根本的な意味を持つ問いは、「人間とは何か」というものである。キリスト者もマルクス主義者ともに「人間らしく行動せよ」という。したがってかれらはともに形式的には同じ倫理規範を承認している。しかしかれらは人間の本質についての答えを与えるにさいして袂を分かつ。ところで人間が何であるかは、人間が實在の全体に対してどのように位置づけられるかを、見ることによってはじめて認識される。

価値倫理学の上に築かれた倫理規範は、所与(aufgegeben)の価値にたいする奉仕を本質的に表現したものである。行動する主体としての人間から出発する倫理規範の規定は、しばしば人格的原理についての顧慮に左右される。換言すれば、自己完成としての倫理性(Sittlichkeit als Selbstvollendung)を分析する。しかしこれも人間の本質が正しく把握される場合には、価値倫理学と同じく、価値の秩序にたいする奉仕という観点によって導かれている。最善なのはこの二つの出発点の結合である。主体と客体との出会によってはじめて倫理性全般、およびとくに倫理規

範についてのまったな理解が生じる。この場合には、倫理規範は「人間は意図と行動において存在にかなうものでなければならぬ」(Der Mensch sei in Gesinnung und Handlung seinsgerecht) といったものにならう。人間はかれに固有の存在によって一つの行動へと自然的に決定されているのではなく、かれの認識能力と自由との介入の下に、かれと出会うすべての存在ならびにかれ自らの本質にかなうものとなるべく、努力しなくてはならないのである。<sup>(1)</sup>

## 註

- (1) W. M. Fischer, Wissenschaftskritik und Naturrecht. Wider die Annahmen eines zur absoluten Wahrheit erhobenen Scientismus, in: D. Mayer-Maly, P. M. Simons (Hrsg.), a. a. O., S. 557-584; J. Fuchs, Glaube, Sittlichkeit, Recht, in: D. Mayer-Maly, P. M. Simons (Hrsg.), a. a. O., S. 751-762; H. Fahrenbach, Existenzphilosophie und Ethik, Frankfurt 1970; J. Sauer (Hrsg.), Normen im Konflikt. Grundfragen einer erneuerten Ethik, Freiburg i. Br. 1977

## 二 法

### (一) 法の概念

法の概念は自らのうちに規範の概念をふくんでおり、それを越えて、規範を義務的なものとして告知し、課するところの権限をそなえた意志の所在を指示している。トマス・アクィナスは法をつぎのように定義している。「法とは協同体のための配慮を任とする者によって公布されたところの、共通善をめぐる理性の秩序づけである」(Lex nihil est aliud quam quaedam rationis ordinatio ad bonum commune ab eo, qui curam communitatis habet, promulgata)<sup>(1)</sup>。



このトマス・アキィナスの定義における理性の秩序づけという表現は、法の価値的基礎を指示している。すなわち、それが意味するのは、法の価値を認識する理性から出てくるものでなければならぬ。法は理性的でなければならない、ということである。法は秩序づけであり、命令であつて、たんなる勧告ではない。それは目的として、それが課せられているところの人々の全体の福祉をめざすものでなければならぬ。正当な権限ある公権の命令のみが法としての力を有する。権限とは、トマス・アキィナスの場合、「協同体のための配慮を任とする」ことを意味する。そして法は公布されることを要する。

法は、それがただ個別的な場合にたいしてのみでなく、なんらかの普遍妥当性をもって課せられるものであり、<sup>(1)</sup> 個人の人格にたいしてではなく、諸人格からなる協同体に課せられる、という点で個別的命令から区別される。命令を下す権限を有する長上であれば、だれでも法を課す権限を有するというわけではない。<sup>(2)</sup>

## 注

- (1) Thomas Aquinas, *Summa Theologiae*, prima secundae, q. 90, a. 4
- (2) H. J. M. Boukema, *Criteria for Good Law*, in: D. Mayer-Maly, P. M. Simons (Hrsg.), a. a. O., S. 713-724; St. Rehl, *Naturrecht-Seinsrecht-Ursprungsrecht*, in: D. Mayer-Maly, P. M. Simons (Hrsg.), a. a. O., S. 903-910; R. Stranzinger, *On Natural Law and the Is-Ought-Question*. *Philosophical Observations*, in: D. Mayer-Maly, P. M. Simons (Hrsg.), a. a. O., S. 455-472

## (二) 永久法

トマス・アキィナスによると、「永久法とは、あらゆる行為と運動とを導くかぎりにおいての、神的英知の計画理念である」[*Lex aeterna nihil aliud est quam ratio divinae sapientiae, secundum quod est directiva omnium actuum et motionum*]. <sup>(1)</sup> 永久法はもともと(原形的には)絶対者(神)の本質においてあらかじめいされる。それ

は存在、ならびにそれにともなった行為、および当為の完全に規定された秩序を実現しようとの絶対者（神）の自由な意志決定によって現実の法となる。この法の公布は絶対者（神）の側から見れば永遠的な働きである。この公布の受動的な結果、つまり被造物によるその認知は時間のうちに生ずるとはいえ、永久法は、存在の規範が必然的に行為の規範を生ずるかぎりにおいて、必然的である。

世界におけるあらゆる法は、それが永久法を告知するものであるか、もしくは永久法からその制裁、責務性の根拠を受け取るかぎりにおいてのみ法としての効力を有するのである。

永久法の「公布」の種類にしたがって、われわれはつぎのように法の区別をする。

(a) 物理的自然法則 (Das physische Naturgesetz)、これは事物が存在するというたんなる事実ともども必然性の法則として（認識ならびに自由の媒介なしに）与えられたものである。ここで法（法則）の概念はより広い意味に解されている。

(b) 自然道德律 (Das natürliche Sittengesetz)、これは人間にたいして人間の理性的な本性ともども自由の法として与えられている。生得的な倫理的理念としてではなく、理性的能力として、また理性が人間ならびに世界の存在に関する洞察から認識することのできる、自由な行動の法として与えられている。

(c) 神の実定法 (Das positiv göttliche Gesetz)、人類は超自然的目的をも有するから、絶対者（神）は神の実定法によって人類をその目的に導く。神の実定法は、単に理性によってだけではなく、絶対者（神）の啓示 (revelatio) によって知ることができる。

(d) 人間の実定法 (Das positive menschliche Gesetz)、社会秩序を維持するために自然法だけでは不十分であり、人間が制定する法（人間の実定法）が必要となる。人間の実定法が自然法に反する場合、それは法の腐敗にはかならない。人間の実定法は、共通善をその目的としていなければならない。

## 註

- (1) Thomas Aquinas, *Summa Theologiae*, prima secundae, q. 93, a. 1  
 (2) K. Larenz, *Richtiges Recht, Grundzüge einer Rechtsethik*, München 1979; K. Kühl, *Zwei Aufgaben für ein modernes Naturrecht*, in: D. Mayer-Maly, P. M. Simons (Hrsg.), a. a. O., S. 817-832; H. F. Köck, *Die Funktion des Naturrechts in einer pluralistischen Gesellschaft*, in: D. Mayer-Maly, P. M. Simons (Hrsg.), a. a. O., S. 803-816; G. Ambrosetti, *Wahrheit und Geltendmachung der Rechte*, in: D. Mayer-Maly, P. M. Simons (Hrsg.), a. a. O., S. 547-556; F. Elliston, J. van Schaick, *Legal Ethics*, Rothman 1984

## (三) 自然道徳律および自然法

自然法 (das Naturrecht, ius naturale) は自然道徳律 (das natürliche Sittengesetz, lex naturalis) の一環である。道徳律は善(倫理の全般)にかかわっているのに対して、自然法(法正なるもの)は正(正義)に、つまり個人対個人、社会対社会の法的秩序にかかわるものである。

倫理(善)は強制できない (Die Sittlichkeit/das Gute/ist nicht erzwingbar) けれどそれは本質的にいって内心 (Gesinnung) に根拠するものであるから。内心というものは強制できないが、しかし法は強制できるものである (Das Recht ist erzwingbar)。とはいえ、いうまでもなく法的義務の遂行は、それが倫理的意志によって動かされていない場合には不完全なものにとどまる。換言すれば、ハンス・ヴェルツェル (Hans Welzel) の言葉を引用すると、「法は保護を与える権力であると同時に、義務づける価値である。法は権力としては強制するものであり、ただ価値としてのみ義務づける。強制は強いるだけであって義務づけるものではない」。

法は共通善 (bonum commune) に秩序づけられている。しかるに共通善にはつきのこととふくまれる。すなわち、個人の福祉を保護し、推進すること、なかなしく個人ならびに団体が倫理的目的に達することを可能ならしめるよう

な、外的な倫理的環境を強制的につくりあげることがある。換言すれば、法は倫理的な義務の履行を強要するのではなく、むしろ可能に言った方がよいであらう。つまり法は倫理的な義務の履行を可能にする外的自由の基準であり、この外的自由を保障することが人権の絶対的本質をなすというのである。したがって、法はたんなる正義に奉仕するものではなく、むしろ、正義への連関において倫理に奉仕するのである。

他方においては、法 (ius) が、その要素の一つとして、正義 (iustitia) という道徳的性質に相応する正の觀念を明らかに含んでいる限り、法を道徳からきりはなすことのできないのは疑いをいれない。ローマの偉大な法学者ウルピアヌス (Ulpianus) は、その有名な正義の定義のなかでこの原理を認めている。その定義とは「正義は、各人に彼の権利を分配する恒常不斷の意思である。法の掟は、誠実に生きること、他人を害しないこと、各人に彼のものを分配すること、これらである。法学は、神事および人事の知識であり、正と不正の識別である」(Iustitia est constans et perpetua voluntas ius suum cuique tribuendi. Iuris praecepta sunt haec: honeste vivere, neminem laedere, suum cuique tribuere. Iurisprudentia est divinarum atque humanarum rerum notitia, iusti atque iniusti scientia)<sup>(6)</sup>、というのである。これら三つの規範(すなわち、誠実に生きること、他人を害しないこと、各人に彼のものを分配すること)はすべて、道徳的な掟であることはいうまでもないが、それらはまた、何とかすれば法にも適用できるものである。たとえば、第一の規範は、とくに倫理的なものと思われるけれども、個人の行動に対する規範を定めるものである以上、そこにはある法的な意味も含まれているのである。人は、立派な、品位あるやり方で——さらに付け加えて、誠実な、遵法精神にとんだ市民として、ということができよう——その生活を送るようにしなければならない。ウルピアヌスの定義の、後の二つの規範においては、倫理的規範に相対する法的なものは、いっそうはつきりしている。他人を害してはならない、という命令は、刑法および不法行為法にわたっての一般的な公理であると解してよいし、他方、各人に彼の分を与えよという命令は、私法の基礎と解することがで

ある。この最後の掟が、道徳のみに関係するものでないことは明瞭である。なぜならば、個人は、単にその隣人にある恩恵を与えるだけでなく、その隣人に権利として属しているものを与えなければならぬからである。

われわれが、自然法は自然道徳律の一部であるところを、法 (Lex, Recht) と倫理 (Sittlichkeit) とを一体をなすものであることが前提とされている。権利 (Ius, Recht) とは義務 (Pflicht) がともなっている。義務のなるところには真の権利もない。しかし倫理は法よりも範囲が広く、なぜなら法的権利は倫理的な責務 (das sittlich Gesollte) の一環とならざるものだからである。<sup>(\*)</sup>

## ※

- (1) H. Welzel, *Naturrecht und Rechtspositivismus*, in: *Naturrecht oder Rechtspositivismus?*, herausgegeben von W. Maihofer, Darmstadt 1962, S. 337; A. Kaufmann, *Rechtsphilosophie im Wandel*, 2. Auflage, Köln 1984, S. 201-230.
- (2) Vgl. dazu: Thomas Aquinas, *Summa Theologiae*, secunda secundae, q. 57, a. 1: *ius est obiectum iustitiae*.
- (3) Ulpianus, *Digesta*, vol. I, capit. I, 10. (This concept of justice is reflected in the old Roman formula "suum cuique". It is usually ascribed to Ulpianus but it appears earlier, in Cicero's works. "Nam iustitia, quae suum cuique distribuit, quid ad deos," says Cicero in his work *De Natura Deorum* (Boston, 1973, p. 148). "Iustitia" — we read in the essay on virtues — "animi est firmiter et constanter velle sua quemque iure meritoque habere et sponte nihili aliud sibi exigere." (*De Officiis. De Virtutibus*, Leipzig, 1971, p. 126.)
- (4) H. Geddert, *Recht und Moral. Zum Sinn eines alten Problems*, Berlin 1984, S. 41-189; O. Höffe, *Sittlichkeit als Moral und als Recht. Eine philosophischethische Problemskizze*, in: *Ethik institutionellen Handelns*, 1982; R. Dreier, *Recht, Moral, Ideologie: Studien zur Rechtstheorie*, Frankfurt 1981; E. Feil, *Trennung von Ethos und Recht*, in: *Herderkorrespondenz* 30 (1976), S. 419-422; J. Fuchs, *Glaube, Sittlichkeit, Recht*, in: D. Mayer-Maly, P. M. Simons (Hrsg.), a. a. O., S. 751-762; R. Stranzinger, *Recht und Moral*,

ihre Unterschiede und Zusammenhänge, in: H. Miechler, E. Mock (Hrsg.), *Ius humanitatis*, Berlin 1980, S. 247-261; W. D. Lamont, *Law and the Moral Order. Studies in Ethics and Jurisprudence*, Pergamon 1981; M. J. Detmold, *The Unity of Law and Morality. A Refutation of Legal Positivism*, Routledge 1984

### むすびにかえて

要約すれば、右に述べたように、「倫理的規範の法的性格」の自然法論上の観点からの理解は過去のことではなく、現在も、未来も、有効である、と私は思う。なぜならば、実定法というのは、時により場によりて (*hic et nunc*) 変化することは、これは人間の経験的な事実である。結論的にいえば、人間は自分の行動を理性的に導くために「超実定法」的な基準 (法規範および倫理規範) が必要である。換言すれば、価値相対主義 (*Wertrelativismus*) の世界の中に生きている現在人間でも未来人間でも、自然法に基づいた行為の明確な基準が必要である、と私は思う。

### 参考文献

- G. Ambrosetti, *Wahrheit und Geltendmachung der Rechte*, in: D. Mayer-Maly, P. M. Simons (Hrsg.), *Das Naturrechtsdenken heute und morgen*, Berlin 1983, S. 547-556
- W. H. Baleskian, *Universelles Naturrecht. Tautologie oder zeitgemäße Weiterentwicklung des Begriffs Naturrecht?*, in: D. Mayer-Maly, P. M. Simons (Hrsg.), *Das Naturrechtsdenken heute und morgen*, Berlin 1983, S. 681-690
- E. W. Böckenförde, F. Böcke (Hrsg.), *Naturrecht in der Kritik*, Mainz 1976
- E. Bodenheimer, *Die Beziehung des Naturrechts zu den Grundwerten der Rechtsordnung*, in: D. Mayer-Maly, P. M. Simons (Hrsg.), *Das Naturrechtsdenken heute und morgen*, Berlin 1983, S. 265-272
- H. J. M. Boukema, *Criteria for Good Law*, in: D. Mayer-Maly, P. M. Simons (Hrsg.), *Das Naturrechtsdenken heute und morgen*, Berlin 1983, S. 713-724

- R. Dreier, *Recht, Moral, Ideologie. Studien zur Rechtstheorie*, Frankfurt 1981
- H. Fahrenbach, *Existenzphilosophie und Ethik*, Frankfurt 1970
- E. Feil, *Trennung von Ethos und Recht*, in: *Herderkorrespondenz* 30 (1976), S. 419-422
- J. Finniss, *Natural Law and Natural Rights*, Oxford 1980
- W. M. Fischer, *Wissenschaftskritik und Naturrecht. Wider die Annahmen eines zur absoluten Wahrheit erhobenen Szientismus*, in: D. Mayer-Maly, P. M. Simons (Hrsg.), *Das Naturrechtsdenken heute und morgen*, Berlin 1983, S. 557-584
- J. Fuchs, *Glaube, Sittlichkeit, Recht*, in: D. Mayer-Maly, P. M. Simons (Hrsg.), *Das Naturrechtsdenken heute und morgen*, Berlin 1983, 751-762
- E. Gans, *Naturrecht und Universalrechtsgeschichte*, in: M. Riedel (Hrsg.), *Deutscher Idealismus. Philosophie und Wirkungsgeschichte in Quellen und Studien*, Bd. 2, Stuttgart 1981
- H. Geddert, *Recht und Moral. Zum Sinn eines alten Problems*, Berlin 1984
- E. Heintel, *Ontologische und transzendente Begründung der Ethik*, in: V. Zsifkovits, R. Weiler (Hrsg.), *Erfahrungsbezogene Ethik*, Berlin 1981
- N. Hoerster, *Wirksamkeit, Geltung und Gültigkeit von Normen. Ein empirischer Definitionsvorschlag*, in: D. Mayer-Maly, P. M. Simons (Hrsg.), *Das Naturrechtsdenken heute und morgen*, Berlin 1983, S. 585-596
- O. Hoffe, *Ethik und Politik. Grundmodelle und-probleme der praktischen Philosophie*, Mainz 1979
- O. Hoffe, *Sittlichkeit als Moral und als Recht. Eine philosophischethische Problemskizze*, in: *Ethik institutionellen Handelns*, 1982
- R. Jakob, *Naturrecht oder Kulturrecht? Psychologische Überlegungen zu Recht und Moral*, in: H. Miechsler, E. Mock (Hrsg.), *Ius humanitatis*, Berlin 1980, S. 77-88
- R. Jakob, *Überleben durch Naturrecht? Zur Ergänzungsbedürftigkeit der mit der menschlichen Existenz gegebenen elementaren Normen durch das moderne Rechtsdenken*, in: D. Mayer-Maly, P.

- M. Simons (Hrsg.), *Das Naturrechtsdenken heute und morgen*, Berlin 1983, S. 763-772
- H. Knötig, *Relevanz humanökologischer Ergebnisse für juristische Regelungen. Skizze über das "Anliegen der Naturrechtslehre" in humanökologischer Sicht*, in: D. Mayer-Maly, P. M. Simons (Hrsg.), a. a. O., S. 773-802
- H. F. Kück, *Die Funktion des Naturrechts in einer pluralistischen Gesellschaft*, in: D. Mayer-Maly, P. M. Simons (Hrsg.), a. a. O., S. 803-816
- K. Kühl, *Zwei Aufgaben für ein modernes Naturrecht*, in: D. Mayer-Maly, P. M. Simons (Hrsg.), a. a. O., S. 817-832
- W. D. Lamont, *Law and the Moral Order. Studies in Ethics and Jurisprudence*, Pergamon 1981
- K. Larenz, *Richtiges Recht, Grundzüge einer Rechtsethik*, München 1979
- K. Lehmann, *Grundwerte in Staat und Gesellschaft*, in: Herderkorrespondenz 31 (1977), S. 13-18
- H. Lenk, *Erweiterte Verantwortung. Natur und künftige Generationen als ethische Gegenstände*, in: D. Mayer-Maly, P. M. Simons (Hrsg.), *Das Naturrechtsdenken heute und morgen*, Berlin 1983, S. 833-846
- N. López-Calera, *Naturrecht und soziales Bewußtsein*, in: D. Mayer-Maly, P. M. Simons (Hrsg.), a. a. O., S. 847-852
- G. Luf, *Naturrechtskritik im Lichte der Transzendentalphilosophie*, in: D. Mayer-Maly, P. M. Simons (Hrsg.), a. a. O., S. 609-624
- D. Mayer-Maly, P. M. Simons (Hrsg.), *Das Naturrechtsdenken heute und morgen. Gedächtnisschrift für René Marcic*, Berlin 1983
- St. Rehl, *Naturrecht-Seinsrecht-Ursprungsrecht*, in: D. Mayer-Maly, P. M. Simons (Hrsg.), a. a. O., S. 903-910
- J. Säuer (Hrsg.), *Normen im Konflikt. Grundfragen einer erneuerten Ethik*, Freiburg i. Br. 1977
- D. A. Seeber, *Was sind Grundwerte?*, in: Herderkorrespondenz 30 (1976), S. 381-384
- R. Spaemann, *Moralische Grundbegriffe*, München 1982



- G. Sprenger, *Naturrecht und Natur der Sache*, Berlin 1976
- R. Stranzinger, *On Natural Law and the Is-Ought-Question*. Philosophical Observations, in: D. Mayer-Maly, P. M. Simons (Hrsg.), a. a. O., S. 455-472
- R. Stranzinger, *Recht und Moral, ihre Unterschiede und Zusammenhänge*, in: H. Mieschler, E. Mock (Hrsg.), *Ius humanitatis*, Berlin 1980, S. 247-261
- A. F. Utz, *Auf der Suche nach der Natur des Menschen. Ein Beitrag zum Begriff der Natur in der Naturrechtslehre*, in: D. Mayer-Maly, P. M. Simons (Hrsg.), a. a. O., S. 941-946
- P. Weingartner, *Auf welchen Prinzipien beruht die Naturrechtslehre*, in: D. Mayer-Maly, P. M. Simons (Hrsg.), a. a. O., S. 517-546
- V. Zsifkovits, R. Weiler (Hrsg.), *Erfahrungsbezogene Ethik. Festschrift für Johannes Messner zum 90. Geburtstag*, Berlin 1981
- M. J. Detmold, *The Unity of Law and Morality. A Refutation of Legal Positivism*, Routledge 1984
- F. Elliston, J. van Schaick, *Legal Ethics*, Rotman 1984
- M. A. Stewart (ed.), *Law, Morality and Rights*, Reidel 1983
- K. Wojtyła, A. Szostek, T. Styczen, *Der Streit um den Menschen. Personalener Anspruch des Sittlichen*, Kewelauer 1979
- N. Hoerster (Hrsg.), *Recht und Moral. Texte zur Rechtsphilosophie*, München 1977
- J. Messner, *Die Natur des Menschen als Grundlage des Sittengesetzes*, in: N. Hoerster (Hrsg.), *Recht und Moral. Texte zur Rechtsphilosophie*, München 1977
- A. Kaufmann, *Rechtsphilosophie im Wandel*, 2. Auflage, Köln 1984
- H. Welzel, *Naturrecht und Rechtspositivismus*, in: *Naturrecht oder Rechtspositivismus?*, herausgegeben von W. Maihofer, Darmstadt 1962